部分

部分

6 鳥尽絵　狩野常信・周信・岑信　一巻

絹本着色　江戸時代（十七～十八世紀）
本紙二九・二×四三五・〇

巻頭の波上を飛翔する白鳳に始まり、孔雀、梅に鶯、川辺に鶺鴒、渓間に八鵬、芦に白鷺、鴛鴦等を描き、最後を雪松に鶴で締めくくる図巻である。巻末に狩野常信（一六三六～一七一三）とその子・周信（一六六〇～一七二八）、岑信（一六六二～一七〇八）の三名の落款と印がある。

狩野派は古画の学習を伝統的に重視するが、鳥をテーマに描いた本図も、その成果の表れであろう。常信は古画の学習、写生等を実に良く行った画師である。繊細な、穏やかな画風が彼の持ち味であるが、桃山期の巨匠・永徳の表現に挑戦して「唐獅子図屏風」の左隻を制作したり、室町期の古様な花鳥図の画風を採り入れたりと、描写表現の追求に対する意欲は実に旺盛で、努力をおしまない。

江戸の狩野派を評価する際に、粉本主義で面白みがないと言われてきた。しかし、絵の手本となる図柄を写していく粉本の存在は、狩野派に限らず、画師が学習していく段階ではごく普通に接するものである。若冲も同様のことを行っている。型を写してそれが絵の中でどのように使われて活かされているのか、それはそれぞれの画師の工夫や持ち味で異なってくる。

・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出典を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

花鳥―愛でる心、彩る技〈若冲を中心に〉
三の丸尚蔵館展覧会図録 No. 40

編集　宮内庁三の丸尚蔵館
制作　株式会社 東京美術
翻訳　横溝廣子
発行　宮内庁
平成十八年三月二十五日発行

©2006, The Museum of the Imperial Collections